

ホッブスにおける「経験」の意味

吉川 要

目次

- 一 ホッブスの體系における機械論の地位
- 二 彼の情念 (Passion) 論の性格
- 三 彼の「現象」(Phenomenon or Appearance) の二面性

こゝにホッブスの機械論とは、それが單なる方法論的興味の對象となることによつて、みられるべきではない。ホッブスの體系において、彼の合理主義を代表する機械論的見解が占めてゐる地位に關して、多くの相異つた評價が下されてゐるのは、右の單なる方法論的興味からするホッブス解釋が如何に一面的であり非歴史的であるかを十分に裏書きするものである。しかし彼が機械論的方法を採り上げたことは、彼をして中世から即ちスコラ的・アリストテレス的思想から區別する指標となつてゐる點には異論はない。故にホッブス解釋の手懸りを、まづ彼の機械論に求める

ホッブスにおける「経験」の意味

ことは不當ではないと思はれる。

ホッブスの機械論は、いふまでもなく十七世紀における歐洲の支配的思想であつたところの自然科学的・數學的方法に、その源泉をもつてゐる。しかし彼の機械論は、かゝる一般的な指標の埒内における單なる依存關係によつて、みてよいであらうか。この點に關しては、ブランドはその綿密な考證を通して、ホッブスの機械論的合理主義の限界を示してくれると共に、デカルト、ガリレイの大陸的機械論との差異についての多くの暗示をあたへてゐる。^(註一)それ故に單なる機械論といふ名の下においては、ホッブスは捉へ切れないレヴィアサンとして現はれてくる。我々はこゝに、ホッブスにおける本質的なものを、その機械論に求めることを控へ、それを彼の情念論におかんとするシュトラウスのホッブス解釋への接近を感じるのであるが、これはまさにホッブスにおける二面性の露呈といへるであらう。

ホッブス解釋の困難な理由は、ヨードルによれば、ホッブスが達着したその當時の教會的政治的争亂による市民生活の混亂を克服するための、彼の嚴格な體系的敘述が、その嚴格さのために、かへつて、その體系を生成せしめた足跡を拭消せしめてゐるといはれる。^(註二)ホッブスの見た自然と社會は、思想の原基としての感覺であり、情念の世界として人間社會であつた。前者はホッブスの機械論の礎石を與へた感覺的質の主觀性の探求となり、後者は萬人に對する萬人の戰爭狀態として規定されたのである。ホッブスにおける自然と社會とのかゝる依存と相反とにおいて、彼の嚴格なる體系にまで結成せる彼の機械論は、如何なる地位を占めてゐるであらうか。ホッブスの最後の勞作であり、革新のレヴィアサンとも目される「ビヘモス」(Behemoth)は、次の言葉で始まつてゐる。「空間におけると同じやうに時間にも高さとは低さがあるとするれば、時間の最高頂は一六四〇年から一六六〇年の間にあると私は心から信ず

る。「しかもこの時期は彼自身の發展にもあてはまる。これをプラントの考證に借つて窺へば、一六四一年には、彼の機械論の基礎なる感覺的質の主觀性は確立されており、彼の哲學を三部作として、「市民論」(De Civitate)をその一部としよるとする構想も出來、一六四四年には、その後十一年を經過して出版されたところの、「物體論」(De Corpore)の大半がすでに仕上つてゐたといはれる。そしてまたこの期間は、感覺的質の主觀性の獨創を中心とするホッブスとデカルトの論争が、最も激した時期でもあつた。それは光學を中心として、互に敵意をいだくまでに對抗した。しかしこゝに興味あることは、自然哲學殊に光學に關しては何處までもその獨創性を主張したデカルトは、その論争の最中即ち一六四二年に、ホッブスの「市民論」の第二版が出た時、それを稱讚さへしてゐる。しかるにホッブスはこの兩者を切り離して考へなかつた。即ち彼はカヴェンディッシュ卿宛の手紙の中で次のやうにいつてゐる。「私は、二つの科學——即ち一は最も奇妙なものであるところの光學、他は「市民論」で示しましたところの、すべての他のものゝ中で最も有益なものである自然的正義に關する科學——の基礎づけの最初の人であつたといふ評をうける價值があると存じます」といつてゐる。ホッブスのかゝる意圖を、彼の言葉通りに受取るべきか否かに關しては、なほ問題が残されてゐるとしても、自然哲學に對するホッブスとデカルトとの態度の相異は、これによつて多くの暗示をうけるではあるまいか。

獨創性を主張して、互に相譲らなかつたホッブスとデカルトとの論争の中心問題であつた感覺的質の主觀性は、デモクリットの傳統から更に一步を進めた近世における自然觀の歴史的な表象であつた。それ故に自然哲學におけるホッブスの獨創性に關する限り、むしろ輕侮の念さへもつたデカルトの論争は、自然哲學者としてのホッブスの粗朴さ

ホッブスにおける「經驗」の意味

に向けられてゐるやうにみえる。しかしプラントの立證するやうに、ホッブスは明らかに獨創的な自然哲學者であるとするれば、それはホッブスの自然觀が優れて社會的であつたことを示すものではないであらうか。プラントがホッブスの機械論に關する考證の結論として、ホッブスは嚴密な意味の合理主義者でも、感覺主義者でもないといふ時、それはデカルトのみたやうな意味でのホッブスでは勿論ないからである。感覺的質の主觀性、それはホッブスが彼の自然哲學における研究の成果であり、彼の光學の問題の中で、獨創的に結實した產物であつた。しかしこの光學は、一六五五年に出版された物體論においては、單に引例としてのみ殘存してゐるのであるが、物體論はその大半をすでに、光學の問題の成熟期に書かれてゐたと推定されてゐる。故にこゝに問題となるのは、光學において結實した彼の獨創的產物たる感覺的質の主觀性が、彼の全體系において如何なる意義をもつてゐるかであり、こゝにむしろ、デカルトとは異つた意味で、自然哲學におけるホッブスの眞に獨創的な性格が窺へるのではなからうか。未熟な私にとつてはこの問題の検討はなほ他日を待たねばならない。しかしホッブスの機械論の性格に對しては、一の問題が提起されたと思はれる。

光學の對象となるものは、いふまでもなく、物理現象であり、ホッブスにおいても「物體論」においてみるやうに、物理學に納まるものである。ホッブスにあつては、物理學は、演繹的に即ち眞理を我々自らで創造する科學たる數學とは異り、そこでは感覺によつて立證される或る出來事の原因認識である。故に感覺が運動として捉へられるにしても、ホッブスにあつては、物理學においては、運動は Imaginable としてあり、一の假設的性格に終はらざるを得ない。この意味においては、物理學は經驗的であり、その限り光學もまた同様である。ではかゝる經驗的性格の一面

をもつた光學が、優れて演繹的な機械論的合理主義に對して、如何なる意味で關聯があるといふのか。物理學における右の如き論證問題は、ホッブスにとつては殆んど興味はなかつたとプラントはいふ。即ちホッブスは、物理現象の演繹的理解を欲したのであつて、その要求のために、たとへ物理現象の理解が、純粹に擬制的にならうとも彼には決して不便ではなかつたといはれる。ではかゝる意味において、ホッブスにおける、感覺的—經驗的なものと合理的—機械的なものとの内的關聯があるといふのであらうか。光學における優れて經驗的な意味は、むしろホッブスが右の兩者の何れでもないといふところにこそ、その全問題が横つてゐると私は考へる。故に經驗とは事實の知識であるといふホッブスの言葉通りに解したプラントにも、また經驗を心理的なものと解したアスターにも、この意味において満足することは出来ない。成程、感覺的質の主観性は、ホッブスにあつても、彼の自然哲學の核心であつた光學の中において結實した産物ではあるが、しかしすでにみたやうに、それは自然の名の下において構成された人間の主權の高揚であり、自然の支配といふ近世における確信にみちた歴史的表象である。「測られ得るものはすべて測れ、そしてなほ測られ得ないところのものでも測り得るために探求せよ」と叫んだガリレイは、自然を構成するといふ結論に到達した。かくしてガリレイは、經驗が構成されるところのア・プリーオリの主張者の一人であり、この全學說の認識原理は、やはり感覺的質の主観性であつた。それにもかゝらず、ガリレイにおける運動の原理たる隋性の法則は、ホッブスにおいては、本質的な問題ではなく、殊に一六三五年から三六年にかけての伊太利への旅行において、ホッブスが、フローレンスでガリレイを訪問した時期は、ガリレイでは問題になつてゐなかつたところの知覺 (Perception) に関する問題に熱中してゐたのである。即ちホッブスは、當時の心理學における缺陷を認め、その缺陷を打

ホッブスにおける「經驗」の意味

破することは、知覺を吟味することであると考へ、それに成功した當時の最初の人であつた。その成果は、彼の著 Elements of law の第一部であり、プラントの考證によれば、これらの問題は嚴密にいつてガリレイ的ではないといはれる。これはまた、落下した場合における物體の弾力性の觀念についての、デカルトの機械論的側面からする論證に對して、ホッブスの物理的側面からする立證の對照においてもみることが出来る。かゝる消息は到る處に見出すのであるが、ホッブスの機械論が優れて經驗的であるといふことは、ホッブスのいふ經驗を固定化してみるを許さないと共に、ホッブスにおける演繹的、特殊性的、擬制的、性格の一半を、これによつて知れると思ふ。

ホッブスにあつても感覺的質の主觀性は、ガリレイにもみたやうな確信にみちた構成の原理認識である故に、それによつて導かれた論證がたとへ擬制的であらうとも、彼には不便ではなかつたと共に、それは他面において、ガリレイにはみられなかつたところの心理的な側面を備へてゐる。かへつて虚偽のない後者がホッブスを強く捉へておればこそ、擬制なる考へが、彼の機械論の眞理性を貫いてゐる。これは、彼が感覺を運動として演繹的に意義づけるためであると同時に、彼にあつては、運動は何處までも場所的運動 (local motion) であり、デカルトのなしたやうに、この他に傾向 (Inclination) としての運動を考へることは、ホッブスにとつては無意味であつたからである。その意味で、ホッブスは、ランダの解釋に反して、^(註五)何處までも運動としての感覺の相對性説を拒否したのである。論理的にして心理的、この両者が常に對照する點に、私はホッブスにおける經驗の個別的な意義を考へるのであるが、では以上のべたホッブスの機械論における二面的性格は、ハースのいふやうに、古代哲學殊にエピクロスの機械的原子論に意識的に歸へることによつて、^(註六)掴まれるであらうか。ホッブスのこの二面性は、何處にその問題の所在があるのか。

そしてそれは如何なる形で捉へられてゐるのか。こゝではこれらの問題への一試みをすぎない。

(註一) Erithjof Brandt, *Thomas Hobbes, mechanical conception of nature*, 1928.

なほ、ランニヒエムによれば、ホッブズの天才は、自己の限界を知つてゐた。その限界と云ふのは、自己の體系が特殊の不可知論であるところにある。(F. Tönnies, *Hobbes Leben u. Lehre*, 1896, S. 157)

(註二) Leo Strauss, *The political philosophy of Hobbes, its basis and its genesis*, 1936.

シェトラウスは、ホッブズの獨創性をみるために、プラントが考證した時期よりも更に初期にまで遡るのであるが、そこにはアリストテレスとの比較から始めてゐる。しかるにマイルタイによれば、初期のホッブズ、即ち彼の人道主義的時期に、すでにユマンロムが彼の中心優位を占めてゐたと云つてゐる。(W. Diltthey, *Gesammelte Schriften*, 1914, Bd. II, S. 362)

(註三) Friedrich Jodl, *Geschichte der Ethik als philosophischer Wissenschaft*, Bd. I, 1920.

(註四) Ernst von Aster, *Geschichte der neueren Erkenntnistheorie von Descartes bis Hegel*, 1921.

アスターは、ホッブズの機械論の唯名論的性格を求め、ホッブズの機械論の課題の解決を、論理的—認識論的側面からではなく、人間學的—心理的側面から試みてゐる。プラントによれば、ホッブズの認識論的見方は「物體論」において始めて、その完全な姿を現はしてゐると云ふ(*ibid.*, S. 123—4)。

(註五) ランゲ・唯物論史(上) 川合貞一譯(三五—四頁)

(註六) Albert Haas, *Ueber den Einfluss der epikureischen Staats- und Rechtsphilosophie auf die Philosophie de 16. u. 17. Jh.* Inaug-Diss., 1896.

ホッブスの機械論がデカルト、ガリレイに比して、優れて經驗的であることは、それが機械的原子論に對して、如何なる交渉をもつてゐるであらうか。これによつて、ホッブスにおける心理學的側面の特殊性を知ると共に、彼における「經驗」の一半を捉へることが出来ると思はれる。

ホッブスは感覺を運動として捉へる。感覺は、その原因たる外的物體からの我々の感官への壓力即ち Inward する作用に對する抵抗即ち Outward する反作用によつて成立する。前者を感覺の外的活動 (External act of sense) とし、後者を内的活動 (Internal act of sense) として區別する。この區別は、彼にとつては、本質的なものであつて、後者の意味において考へられる情念 (Passion) は、何處までも、受動的 (Passive) として規定する^(註1)。これは彼をして、スコラ的な感覺論と區別するからである。殊に前述の區別は、内的活動は必ず外的活動即ち質料 (Matter) なしに成立しないことを示してゐるからである。アリストテレスにおける知覺の特徴が、質料なしに感覺的な形相 (Form) を受取る力であるとすれば、その限りにおいては、ホッブスにあつては、形相とは印象にすぎないと考へる。ホッブスにおいては、情念は、當時なほ支配的な考へであつたところの生得的なものとして、直接に前提されたのではなく、彼が本格的に哲學問題に没頭し始めたと思される一六三〇年頃から、感覺的質の主觀性に到達した一六四一年に至る十餘年の長きに亘る獨創的な頭腦の中に生成して來たものである。即ちこの哲學的活動の初期においては、感覺的知覺を構成する反作用は、腦髓から始まると考へてゐた。その後には、外的壓力は腦髓に行くものと永く持續してゐるものは心臓に到達して情念として残るものがあると考へた。この考へはさらに發展して、前述の反作用は心臓から始まるといふ情念に結晶して行くと共に、感覺はその最も現實的に捉へ得る形態即ち眼前に限定して來たのである。

何故なれば、光は脳髓の中ではまだ見ることは出来ない。それは眼前において始めて現實的となるからであると考へた。こゝに感覺は情念といふ反作用(妨害)によつて成立することとなる。ホッブスにおける感覺的質の主観性は、かゝる發展過程を経ることによつて、具體化されたのである。故に彼が感覺を *Fancy* なる言葉で代表せしめてゐるのは意味深いことである。即ち彼は以上の意味から、*Sense* にアクセントをおくことによつて生ずる誤解をさげんとしたからである。^{*}これがまた、彼の考へを現象主義 (*Phenomenalism*) と呼ぶ一面でもある。ではこの考へが如何なる點にまでエピクロスと關聯があるかに先だつて、こゝに興味あることは、十七世紀に復興せる原子論は、エピクロス學派における詩人として有名な、ルクレティウスのそれであつたといはれるが、しかしこれら復興論者にあつては、感覺的質の主観性には到達しなかつた。ベーコンも、その著 *Novum Organon* の中に、デモクリトスの原子論に關説してゐるとはいへ、やはり右の主観性は結實しなかつたのである。この消息は、ホッブスとエピクロスとの關係について、すでに一の暗示をあたへてゐるといへないだらうか。

Leviathan, S. 3 (Everyman's Library)

...this seeming, or fancy, is that which men call Sense... But their (私註—Sensible qualities, divers motions) appearance to us is Fancy, the same waking, that dreaming.

ホッブスが *Seeming* といふことに重點をおいたのは、決して偶然ではない。ホッブスが彼の研究において基礎にとつた最初の現象は、發光體は同時にあらゆる方面からみえるといふこの奇妙な問題を説明することであつた。殊に彼の哲學的活動の出發としてみられる「小論文」(フランドトにより假りに *little treatise* と呼ばれる)において、外的物體から如何にして、感覺の原因(物質的種)を送つてくるかの問題は、光學において始めて單純な運動によつて説明されることが出來た。それは硬

ホッブスにおける「經驗」の意味

度を考へる際にも、これに還元して考へてゐる。

すでにみたやうに、ホッブスの解する情念は、感覺運動の一契機であり壓力に對する抵抗として、何處までも受動的に捉へられる。しかしこれに反して、エピクロスにおける情念は、外的なるものからの獨立或は解放の原基として考へられる。ではエピクロスにおいて情念は、それ自身としてかゝる積極的内實を備へたものであらうか。いな彼にあつても、快樂は一の純粹に否定的な性格として、即ち苦痛からの解放として捉へられたものであり、その意味でエピクロスの幸福論は、單なる享樂主義ではない。(註三)ギリシヤ都市國家の解體期の中にあつて、エピクロスは懷疑主義に對抗して問ふべき次の如き課題があつた。知識は可能でなければならぬ。でなければ行爲の確實性は不可能となるだらうといふことであつた。かゝる強き實踐的性格は、個人を超えた本體論的統一の否定となり、感覺的知覺の虚偽ならざることが強調せられ、知識の絶對的に確實な出發點としての感覺が實踐的必然性の上に指摘されたのである。かくしてエピクロスは、かゝる優れて實踐的な性格によつて、デモクリトスの機械的自然觀を社會狀態の考察の上に移行せんと企てしめたといはれる。故にエピクロスにあつては、徳 (Virtue) に強固な力 (Power) をあたへる基礎なる快樂は、理性以前に備つてゐる價值感情であり、それ故に理性の全面的な否定ではなく、空虚な理性の否定である。しかしこの意味においては、ホッブスの情念は、より、感覺的であり、より、反理性的である。それは強ち彼の考へる情念の世界としての人間の自然狀態を想起しなくても、情念は何處までも受動的にのみ解されてゐる點にすでに求めることが出来る。即ちホッブスは、動物——人間をも含めて——に特有な運動の一つとして情念をあげてゐる。他の一つの運動とは呼吸、脈膊のやうな生的運動 (Vital motion) であり、表象を必要としない運動である。これに對して情念は、

恣意的運動 (Voluntary motion) であり、表象を必要とする運動といふよりも、表象こそ、「……すべての恣意的運動の最初の内的發現である」といはれる。この点だけからみれば、彼も情念に何等か積極的な内實を許してゐるやうにみえる。何故なれば、彼はかゝる情念の運動を努力 (Endeavour) と呼んであり、この努力は、それがひきおこされた或る物に向つて行く (forward) 時には、欲求と呼ばれ、離れて行く (homeward) 時には、^(註三) 嫌惡と呼ばれる。しかしエピクロスの場合にみたやうに、すでに價值感情を備へた意味での恣意ではなく、それ故に、ホッブスの情念は本能といふことより一步も出てゐないと解されてよいであらう。^(註四) しかも等しく情念と呼ばれながら、人間には動物にさへみられないやうな情念が、即ち權力を求めて止まぬ無限の欲求があるのであるが、情念はホッブスにあつては何處までも受動的であるとすれば、これをひきおこした外的原因は何處にあるであらうか。しかるにエピクロスにおける情念は、かゝる外的原因からの獨立であり、苦痛からの解放であり、快苦の積極的平均 (Positive Bilanz) である。^(註五) このことの可能なためには、エピクロスの情念はすでに極めて理性的なものを含んでゐるのである。即ち彼にあつては、一度受けた苦痛を癒すために、次には、より多くの快樂を求めるのでない。苦痛からの出來得る限りの大きな解放は妨害されない平靜を心の中で維持することである。故にエピクロスにおける自由とは心における平靜即ち Ataraxie であるが、ホッブスにとつては情念は妨害である故に、彼においても自由とは妨害されないといふことであるとしても、彼においてはエピクロスと異つて、後にのべるやうに快樂と自己保存との間の不安定が常に殘存するのである。意志の自由が問題ではなく人の自由が問題であるといふ點において、エピクロスと同じく人間的立場にありながら、^(註六) エピクロスと異つた見解に到達して行つた理由は何處にあるであらうか。

ホッブスにおける「經驗」の意味

すでにエピクロスにあつては、快樂は否定的な性格として捉へられてゐるのであるが、ホッブスはそれを苦痛と共に動物性として肯定的に解してゐる。即ちホッブスにあつては、人間における情念は動物に比べて種類が多いといふ丈の差異である。即ち彼によれば好奇心 (Curiosity) をその一つとしてあげてゐる。好奇心は人間特有な情念である。それは、「何故」、「如何」を知らうとする欲求であり、換言すれば原因についての知識欲であつて、原因の原因にまで追求せしめるものである。原因の原因とは神であり最初の運動者である。かゝる探求の情念はなるほど人間特有のものではあるが、それは定義づけられてゐない故に科學ではない。宗教もまた人間にのみ特有なものである。しかしそれはすべての人間に好奇心をおこさせるものではない。それは心によつて憶測されたか或は公然と許されてゐる噂から想像されたところの、見えざる力についての恐怖だからである。恐怖とは、彼によれば、客體から害を受けるといふ意見をともなつた嫌悪である。^(註七)意見とは、彼によれば、假定の上に立つたところの、心的推理の連鎖の切斷であつて、それは結論ではなく、それ故に科學ではない。^(註八)これによつても明らかかなやうに、彼によれば、情念の恣意性は悪しき無限であり眞に原因を知らないものであればこそ、人間に特有なものではあるが動物とは程度の差にすぎないとされる。即ち情念の恣意性は何等かの外的原因によつてひきおこされたものにかゝはらず、その受動的なといふ原因を知らざることから、全く動物と差異なきものである。これはホッブスの恣意的分類ではなく、全くその當時の歴史的環境である。ホッブスが光學と共にその獨創的價值を主張したところの「市民論」において、平和を害するところの諸個人の心を強く捕へるやうな教説及び情念を説き、その具體的な情念として、長老派、法王黨の外に、「宗教を口實として下級市民が奪はんとする自由」に關して、ロンドンその他の大貿易都市の人々と結合せるピューリタ

ニズムをも、かゝる情念の一つとして考へてゐるのである。^(註九) かつては、ピュリタンであつたそのホッブスが、彼の論駁の對象たる自然状態の構成要素たる情念世界の徒輩としてピュリタンをみるといふことは、彼のいふ自然状態が單なる理念型的な段階ではなく、情念なる優れた死的内實をもつたものであることを示してゐる。故にホッブスにおいて情念は、内容的には固定化してゐることを許さないと同時に、かゝる情念は彼の自然哲學においてみだした様に、外的壓力が心の中に長く持續したために結晶した結果であるとすれば、それはエピクロスの場合のやうに、アタクシイを身に附けた賢人 (Wise man) を各個人の間に見出すことは最早困難である。これは後にものべるやうに、ホッブスにおける情念は單に個人的心理的なものでないことが明らかであらう。

61

苦痛は、肉體的のそれよりも、むしろ精神的なものにより大きな苦痛を認めたエピクロスに對して、ホッブスにおける苦痛は、むしろ心の外にある。何故なれば、ホッブスにあつては苦痛の原因が問題であるが、エピクロスの場合には、その持續が問題である。即ちエピクロスにあつては、物と心との區別は苦痛の持續の長短に歸着する。彼はいふ心においては、現在の苦痛のみでなく、過去に受けた苦痛でも現在にまで持續するのみならず、來たるべき苦痛をも感ずるからである。さらにまた快樂に關しては、肉の快樂はそれを現在において味ひ盡せないが、心のみは、我々の肉的存在の有限性を慰撫することによつて、現在を完全なものとして教へ、別に無限なものを考へる必要を認めないのである。これこそエピクロスにとつては、人間を動物から區別するところのものである。こゝに彼の幸福論の否定的性格があり、情念は同時に理性的であるのであるが、しかしエピクロスは、辯證法に對しては輕蔑の念をもつており、それと同様にレトリックに對しても否定的である。それは彼がセネカに宛てた書翰の中の「友は多くを要せず」

● ホッブスにおける「經驗」の意味

の一句につきてゐる。^(註9) アタラクシイは他人に強要すべきではなく、故に言語は、むしろルクレティウスにおいて明らかに示されたやうに、經驗の基礎において成立するものではなく、生活感情の直接的な表出となる。故に契約は、エピクロスといふところの自然的行爲によつて基礎づけられた道徳性の普遍化にすぎないのであり、法哲學、國家哲學はむしろ附録的に接續されてゐる。こゝにエピクロスにおける心理的なものゝ性格が、究極において、ストアと同様に賢人として具象化せざるを得ない消息をみる事が出来る。しかしホッブスにとつてはそれは、レヴィ、アサンである。なるほどホッブスもエピクロスと同じやうに、道徳性の基礎として快樂なる情念をおいた。しかし彼にとつては、快樂と自己保存との間には常に不安定性が存在する。それは彼にあつては、エピクロスのみた本源的價值感情の一般性を放棄したからである。^(註11) それと同様に彼は、人間の原状態に關するルクレティウスの牧歌的幻想とも決別したのである。ホッブスにおいてもエピクロスにおいても、情念は行爲の基礎として個別的な意味をもち、それ故にこそ經驗する主體としての人間である。エピクロスが單なる享樂主義ではないといふのもこの意味である。しかしホッブスにあつて情念は、エピクロスの場合にみたやうに、單に外的壓力の持續の長短によつて物と區別されるのではなく、すでにみたやうに心に結晶凝固したもの（『動物性』）として結實したのである。それ故に彼の情念は、エピクロスよりも更に強固な基底を行爲にあたへると共に、反面に極めて不安定性を帯びてゐる。この不安定性の具體的性格は、彼にあつては或る一定の形態における情念が（『人間が』）問題であつたからだと思はれる。それは彼の自然哲學では、まづ表象の形態の下に捉へられた。情念はこゝにその認識の端緒をもつ。しかしそれは他面極めて演繹的推理といはねばならない。何故なればエピクロスに見る直接性に對して、形態の論理とも目されるホッブスの運動論は、情念と

理性の分離の上に立脚してゐるからである。彼の主張した感覺的質の主観性はまさにかゝる二面性であつた。しかしこの分離はまだ彼の自然哲學においては、なほ極めて抽象的だといはざるを得ない。何故なればホッブスがいふやうに、情念は個人の場合には、必ずしもはつきりと見られると限らない。擾亂してゐる群衆の場合に始めて我々は見ることが出来るからである。^(註一三)しかしそのことは個人の胸の中に秘かに燃えてゐる情念を否定するのではない。^(註一三)何故なれば情念をもたぬのは、死んだも同様だからである。^(註一四)こゝに私はホッブスが情念に關して、自然哲學における感覺的質の主観性から道徳哲學、政治哲學における情念論へと展開して行く具體的な意義をみたいと思ふ。これに關聯してさきのべたやうに、ホッブスが、光學と市民論とにおいて共にその獨創性を主張したことは興味ある言葉だと思はれるが、こゝに、人間の動物性を情念論に求めた彼の歴史的な意義の論理的な性格が捉へられるのではなからうか。私はこゝにホッブスの機械論の優れて經驗的な性格をみるのであり、それはさらに、エピクロスの場合にはみられなかつたところの、ホッブスにおけるレトリックと定義の關聯、道徳性と合法性との分離、契約の擬制化、レヴィアサンといふ諸問題の所在が窺はれて來るのであるが、それはともかく、嚴密な意味で感覺論者ではないといはれるホッブスは、エピクロスでもあり得ないのである。

(註一) Brandt, *ibid.*, S. 70.

(註二) E. Zeller, *The Stoics, Epicureans and Sceptics* (Translated by the Rev. O. J. Reichel, 1892) S. 505.

(註三) Leviathan, p. 28.

(註四) *Tonnies, ibid.*, S. 184.

ホッブスにおける「經驗」の意味

- (註五) Jodl, *ibid.*, S. 24
(註六) Tommes, *ibid.*, S. 179—80. Haas, *ibid.*, S. II, 34
(註七) Leviathan, P. 26, 53.
(註八) *ditto*, p. 30.
(註九) 清水幾太郎「社會と個人」——社會學成立史——(上) 二九一頁—三〇八頁
(註一〇) Haas, *ibid.*, S. 23.
(註一一) *derselbe*, S. 106.
(註一二)(註一四) Leviathan, P. 36.
(註一三) *ditto*, p. 34.

三

以上みた如くホッパスにおける情念論の性格は、彼の自然哲學の歸結たる感覺的質の主觀性のより、具體的な現象としての戰爭状態であつた。こゝにホッパスの抽象より具體へ、即ち彼の自然哲學より社會哲學への展開の必然性が認められるのであつて、こゝにこそホッパスの機械論の優れて經驗的な意義があると考へられる。何故に彼が哲學を自然から始めねばならなかつたかといふことは、全くその當時の歴史的環境であつて、神學からの哲學の獨立、即ち哲學の對象は計算し得る物に限定されることによつて、それはまた宗教からの道德の獨立、即ち法的規範の擬制化が日程に上がることによつて、自然はこゝに二種の意義を背負はされた十七世紀の歴史の表象となつたのはこゝに更めて説くまでもないことである。こゝにホッパスにおける論理的なものとの心理的なものとの二面性の歴史的な意義がある。

と同時に、その二面性が彼における「經驗」によつて具體化されて行く處に、ホッブスの眞に獨創的な性格が窺へるといはざるを得ない。この意味において、私はホッブスの情念的性格を直接に彼の政治的側面から歸結を引出さうとする試みに對して満足することは出来ないのである。では以上の意味におけるホッブスの「經驗」は如何なる形において捉へられてゐるであらうか。換言すれば、その端初における形態は何處に求められるべきであらうか。この點にホッブスの光學が彼の全體系に對する意義を吟味してみたいと思ふ。

發光體の現象はホッブス自身がいふやうに、彼にとつては最も奇妙な現象であり、それはまた彼の自然哲學の中心問題であつた。何故にそれは現はれて來るか、如何にして現はれるかといふことが、自然哲學において彼の本格的な哲學活動が始まつた挑戦題目であつた。これに關して彼がまづ措定した考へは、感覺の原因は外的物體から發出する種 (Species) であるとみた。ことに彼は發出論 (Theory of emanation) をもつ。しかしこれは彼が後に靈媒論 (Theory of medium) に推移する課題を含んでゐる。即ちこの種は質をもたないがしかし物體である微粒子 (Particle) と考へられる。故に質は種に内在せるものではないがしかし種は運動からのみ成立してゐる感覺の内的活動の原因であるといふことこそ、彼の發出論の源泉であるからである。感覺的質の主觀性は、この推移の歸着點であつた。しかしいま私にとつて問題なのは、この推移の詳細ではなく、その歸着點にある。何故なればこゝにホッブスにおける心理學的性格が最も特徴的に窺へると思ふからである。

ホッブスはこの歸着點に立つて、感覺的質は主觀的であると斷定を下すのであらうか。彼は靈媒論に推移して行きつゝも、「感覺的質は、客觀的でもなければ主觀的でもない」といふ彼の言葉が、他面において我々の速斷を常にさ

へぎるのである。それは彼の認識論がその完全な姿で現はれてゐるといはれる。「物體論」に至つても、なほつゞいてゐるところの彼の自然哲學におけるレヴィアサンである。故に彼についていはれ得る全部は、感覺活動とは場所的運動だといふことのみが残される。しかしそれにもかゝらず、彼は主觀性といふ最後の歸結に直面せざるを得なかつたのである。即ち外的物體とは異つた或るものに近附いてくる。それを彼は「物體論」の中で、*The most admirable* と呼ぶ以外何等の説明をも加へようとしないのである。(註)このことは、彼によれば、諸々の現象の中で最も根本的な現象は知覺 (Perception) であるといふ考へから、知覺を指してゐるものと推定されるのではあるが、しかし彼にはこの限界を越えて、意識一般の變化を吟味することは無意味であつたからである。即ち彼は意識一般といふことは問題ではなかつたのであり、その意味で何處までも、經驗的であり個別的であり、こゝにこそ情念論へ推移する展開の契機をみるのである。これがまた、ホッブス解釋の分歧する焦點でもあつて、ホッブスにおける心理的側面の過大評價、論理的側面の過大評價の生ずる處であるが、しかしホッブスの哲學における實踐的性格をこゝに求めねばならぬと考へる。即ちこの間の聯關について我々は同じく「物體論」においてホッブス自身の言葉をもつてゐる。「哲學の最大の意義は、我々が豫見された作用を我々の利益のために利用し、且つ我々の認識にもとづいて我々の力と能力の及ぶ限りこれを意識的に人間生活の促進へともたらし得るといふ點にある。」ホッブスにおいては、自然哲學は社會哲學への單なる論理的便宜ではなく、社會哲學は自然哲學の附録ではない。彼にとつては、經驗こそを全く文字通りに、「最も稱讚すべきもの」である。

ホッブスにとつては、「現はれて來たそのもの」 (*Apparition itself*)こそ最も稱讚すべきものであつた。といつ

てそれは單なる記述ではない。彼が經驗を拒否したのは、かゝる單なる記述としての經驗である。それは彼が情念論において否定的に解した意志力の検討が、欲することの能力 (Faculty) の意志への依存性如何に關してであり、換言すれば行爲 (Act) への最後の決定者としての意志力の吟味のための情念と思ひ合すべきである。感覺的質の主觀性即ち感覺がすでに反作用 (情念) を一契機として成立する以上、ホッブスにとつて現はれて來たそのものは、もはや單なる自然ではない。故にこそ、すでに表象自身が恣意的運動であり、擬制の端初である。感覺的質は何等客觀的なものではない。しかも他面において情念は單にそれ自身で原因ではない。外的壓力の持續の結果として結晶したものである。その意味において感覺的質はかゝる Animal spirit の中にあるのではない。單に主觀的なものではない。これがホッブスの見た自然である。故に彼が物體をもつて哲學の對象として限定する場合にみられるところの自然的物體 (Bodies Natural) と政治的物體 (Politique Bodies) の區別に對して、我々は直ちに後者を人爲的性格として前者に對照すべきでない。何故なればすでに明らかかなやうに、彼が見た自然は、すでにその意味では人爲的性格である。こゝに嚴密な意味における感覺論者でないホッブスが立つており、自然の人爲化こそすでに經驗を超えねばならぬ。何故に超えねばならぬであらうか。彼のカヴェンディッシュ卿宛ての手紙に、「……若し我々が太陽の收縮を考へるために一の假設を作ることが出来たとしても、自然的物體の性質なるものは一つの原因が更にそのやうな假設を益々要求するといふやうなわけで、遂には神からの直接の助力を乞はなくては全く終結をみるものが出来なくなります。そこで我々は數學において遂に一の定義に到達致します。何故かと申しますに、定義とは我々の間の協約と同意によつて眞なりとされた端初即ち原理であるからです。」^(註三)單なる記述の意味の經驗の終結は神に通じてゐるのである。しかも

この場合注目せねばならぬことは、妨害によつて感覺の擬制化をもたらす情念も、假設の名において拒否されており、それはすでにみたとほり好奇心の終結と同様であるからである。しかもこれは人間特有な動物性として拒否されるのである。運動としての感覺は、ここに定義と經驗との對蹠としてその最も現はな姿をみせて來るのである。こゝに嚴密な意味における自然哲學者ではないホッブスが立つてゐる。ベーコンがその著「自然及び人間界の解釋に關する斷片」において、自分は自然哲學のみについて語つてゐないといつた言葉を、ホッブスは彼の情念論の上に實現して行つたのである。優れた意味で經驗的であつたホッブスが、ベーコンの歸納法から獨立してゐるのも決して偶然ではない。ホッブスの見たものは、まさにかゝる現象 (Phenomenon or Appearance) の二面性である。^(註三)こゝに私は彼の經驗の優れた意味の端初をみたいと思ふ。エピクロスの法哲學の目標が、嚴格な原子論的基礎の上に經驗的社會理論を打建てることであつたといはれても、ホッブスにあつてはエピクロスの理念は認められないといふ理由はすでに明らかであり、こゝに彼の眞に獨創的な性格を求めることが出来るのである。故に彼における心理的なるものと力學的なるもの對蹠として、彼の體系を平行論 (Parallelismus) とは呼びえても、偶因論 (Okkasionalismus) ではない。しかも彼にあつては、スピノーザの情念論の輝しき原理といはれる「情念は情念によつて支配される」ことは出来ない。しかしその原理においてスピノーザの先驅者と目されるベーコンにあつては、それはすべての有効な道德的教育にとつて不可欠な前条件となつてゐたのである。^(註四)何故なればベーコンにあつては、道德の基礎として生得的な情念を成立せしめる條件の探求こそ彼の問題であり、それによつて彼にとつては心理的な訓練の方法を見出すことであつたからである。しかしホッブスにとつては、この意味における教育は全く不可能なことである。何故なればエピクロスにあつ

てはなほ問題であつたところの、法的規範は自然的なりや便宜的なりやの課題は、ホッブスにとつては明らかに後者であつた。さらにそれは兩者を分離したにすぎないといはれるベーコンに比して、より後者であつたからである。即ちベーコンにおいて幸福はなほ抽象的であつた。それは社會的衝動とも呼ばれてゐるものであつた。それ故に彼に於ては、宗教的衝動がなくても不自由しないといふ意味でのこの第二のより善き自然即ちこの倫理的なものが、一般的なもの並に個別的なものの上に若し現はれないとしても、それを條件づける心の状態——習慣と習練、模倣と躰法と讀書力等々——を倫理的なものの中に引き入れて考究することがベーコンにおける心理的なものにとつての問題であつたからである。しかし諸勢力の均衡の一切の可能性が崩壊し、人間の本質の討究から始めねばならなかつたホッブスにとつては、ベーコンにはなほ残存してゐた保守的なものが、哲學においても政治學においても取拂はれねばならなかつた。ベーコンがその當時の社會における政治的或は宗教的諸形態になほ囚はれて、心理的なものを求めてゐるに反して、ホッブスにとつてはそれを更に一般的な視野において討究することであつた。それはホッブスの立つてゐる歴史的環境の必然であり、彼の情念論の一般的性格であつた。こゝにさきにみたやうに、ベーコンの歸納法からさへも離れねばならなかつた論理的な理由が窺へると思ふ。その意味においてホッブスの情念論はベーコンのそれに比して、より個別的でありより一般的である。こゝにベーコンを通すことによつて見出されるホッブスの平行論のより具體的な性格があると考へる。またこれがホッブスとヘーゲルとの關聯をみようとする試みを生ぜしめるのも決して偶然ではないと思はれる。經驗こそホッブスの精神であり、彼における經驗はそれ故に決して固定化して考へることを許さないのである。ベーコンをまたずとも、ホッブスは單に自然哲學のみについて語りはしなかつたからである。

ホッブスにおける「經驗」の意味

以上のべてきたやうに、ホッブスの光學が彼の全體系に對して有する意義を、その端初的性格としての彼の現象における二面性に求めたのであるが、これによつて明らかになることは、ホッブス自身の思想の發展するにつれて、殊に「物體論」に至つては、光學の問題は全く一の引例としての意味しかもたなくなつてゐるといふことは、彼の前半生をとらへた光學の課題たる「現象」が一層具體的な形において把握されてゐる結果だと思はれる。かゝる抽象より具體への過程といふことをホッブス自身の口からは決して語つてゐるのではない。しかしこれは當時の歴史的な課題であり、そのホッブスの性格を光學を介して試みたのであるが、これによつてホッブスの三つの體系——自然哲學、道德哲學——政治哲學——の内的關聯の優れた意味における經驗的、即ち具體的な性格がその眞に獨創的な側面から捉へられるのではなからうか。

(註一)「物體論」の引用はマクドナルドの前掲書に依る。

Of all the phenomena or appearances which are near us, the most admirable is apparition itself, to phainesthai; namely that some natural bodies have in themselves the patterns almost of all things, and others of none at all. (De Corpore, ch. 25. The English works, vol. I, p. 389)

(註二) 前掲の半紙 (E. W., vols. VII, p. 468) の引文は半紙 (E. W., vols. VII, p. 459—60) のマクドナルドに依る。

(註三) 「一橋論叢」第七卷第五號に既載の拙稿に於ては、Appearance を「假象」に譯出したのであるが、右の(註一)に示す *phainesthai* or *phenomena* と同じく關係からなつても、同義に使用されてゐる故に右を「現象」と訂正する。

(註四) Jodl, *ibid.*, S. 194.

(註五) G. P. Gooch, *Political thought in England, from Bacon to Halifax*, 1923, p. 23. (一七・二一・一五)